

仏像・神像は、人々が「神仏のすがた」を想像し、礼拝の対象としてふさわしい、あるいはこうあって欲しいと思う理想のすがた造形化したものです。そのため、面長で痩せていたり、丸々とふくよかだったり、そのスタイルは造られる時代や地域によって様々に変化しています。

本展では大阪市立美術館所蔵山口コレクション中国彫刻を中心に、北魏^{ほくぎ}そして続く東魏・西魏の仏像、道教像と関連作品を展示しています。中国南北朝時代の北魏は、今から 1500 年以上前に北方の遊牧系民族が樹立した強大な帝国です。

西暦 386 年に内モンゴル^{せいらく}・盛楽で建国し、398 年に山西^{へいじょう}・平城、493 年には河南・洛陽と、徐々に南へ遷都しました。

北魏では国家事業としての寺院の建立と巨大な石窟の造営が行われました。また仏教が広く中国全土に浸透するなかで、地域ごとに特色のある仏像が生み出されるようになります。実は長い中国仏教史において、最も優れた石造仏教彫刻が生み出されたのは唐とこの北魏でした。

一方、道教は老子を祖とする中国固有の宗教です。もともと道教では礼拝の対象とする偶像がありませんでしたが、中国各地で浸透しつつある外来の宗教＝仏教の影響を受けて造られるようになります。そのため道教像の出現は仏像に比べかなり遅く、北魏頃と考えられています。

[第一室] 北魏の優品を中心に

はじめに当館山口コレクションを代表する北魏の三像(天安元年・如来坐像、菩薩交脚像龕、太子半跏思惟像龕)をご覧ください。展示室中程には黄華石^{こうかせき}と称される黄色がかった石材を用いた緻密な小像が並んでいます。残念ながら当どのような工具で彫刻していたのか明らかではないのですが、北魏後期以降このような精巧な像が造られました。その奥には大型像を展示しています。これらのには多くの供養人(寄進者)のすがたや氏名が刻まれています。これは邑義^{ゆうぎ}と称する仏教徒の信仰団体により造られたことを示しています。

石造	^{にょらいざぞう} 如来坐像	^{ほくぎ} 北魏・天安元年 [466]	本館蔵[山口コレクション]
石造	^{ぼさつこうきゃくぞうがん} 菩薩交脚像龕	北魏 [5 世紀後半]	本館蔵[山口コレクション]
石造	^{はんかしい} 太子半跏思惟像龕	^{たいわ} 北魏・太和 16 年 [492]	本館蔵[山口コレクション]

石造	如来坐像	北魏・太和 18 年 [494]	本館蔵[山口コレクション]
石造	如来三尊像	北魏 [6 世紀前半]	本館蔵[山口コレクション]
石造	菩薩三尊像	北魏・延昌 4 年 [515]	本館蔵[山口コレクション]
石造	如来三尊像	西魏・大統 8 年 [542]	本館蔵[山口コレクション]
石造	如来三尊像	西魏 [6 世紀中頃]	本館蔵[山口コレクション]
石造	菩薩三尊像	東魏・武定 7 年 [549]	本館蔵[山口コレクション]
石造	如来三尊像	西魏 [6 世紀中頃]	本館蔵[山口コレクション]
石造	如来立像	北魏-東魏 [6 世紀中頃]	奈良・薬師寺蔵
石造	四面像	西魏 [6 世紀中頃]	本館蔵[山口コレクション]
石造	如来三尊像	北魏・景明元年 [500]	本館蔵[山口コレクション]
石造	如来三尊像	北魏 [6 世紀前半]	本館蔵[山口コレクション]
石造	如来三尊像	北魏 [6 世紀前半]	
石造	菩薩立像頭部	河南省龍門石窟賓陽中洞将来	本館蔵[江口治郎氏寄贈]

[第二室] 道教像と石窟将来像をめぐって

初期の道教像は仏像とほぼ同様のすがたで、仏像なのか道教像なのか判別しがたい像も多くみられます。ひよっとすると、制作者もそれを拝む人も、仏像と道教像の違いがよくわかっていなかったのかもしれませんが。

石窟とは、山や崖を掘削し、その内部をくりぬいて造られた、人間が入ることができる規模の空間のことです。ここでは中国の代表的な石窟寺院のうち、龍門石窟(河南省洛陽市)および天龍山石窟(山西省太原市)の壁面浮彫を展示しています。

また本展では特に、天龍山石窟・維摩坐像に表されている凭几ひょうきの、日本で制作された木製漆塗の実物作品もあわせて展示しています。

石造 如来坐像		北魏-西魏 [6 世紀前半]	本館蔵[山口コレクション]
石造 道教四面像		西魏・甲戌銘 [554]	本館蔵[山口コレクション]
石造 三尊像		北魏・永平 3 年 [510]	
石造 道教三尊像		北魏・延昌 4 年 [515]	本館蔵[山口コレクション]
石造 道教四面像		北魏・永熙3 年 [534]	本館蔵[山口コレクション]
紙本墨拓 仏道四面像		北魏・神龜2 年 [519]	本館蔵[師古斎コレクション]
石造浮彫 供養人行列図	龍門石窟古陽洞将来	北魏・永平 4 年 [511]	本館蔵[山口コレクション]
石造浮彫 維摩坐像	山西省天龍山石窟第 3 窟将来	東魏 [6 世紀中頃]	本館蔵[山口コレクション]
石造浮彫 菩薩半跏思惟像	天龍山石窟第 3 窟将来	東魏 [6 世紀中頃]	本館蔵[山口コレクション]
木造漆塗 凭几		室町時代 [16 世紀]	奈良・薬師寺蔵

□ 山口コレクション中国彫刻

関西の実業家であった山口謙四郎氏(1886-1957)が大正から昭和初期にかけて一代で収集した、仏教・道教造像 125 点からなる世界的規模の中国石造彫刻コレクションです。山口氏は旧山口銀行(現、三菱東京 UFJ 銀行の一部)の創業者・山口吉郎兵衛氏の四男として大阪船場で生まれ、関西信託社長や関連企業の役員を務めました。そして中国の石造彫刻に強い関心を示し、南北朝時代なかでも北魏を中心に、当時まだ研究の進んでいない地方的な作品も含め網羅的に収集しました。

□ 銘文・紀年銘

銘文とは、金属器や仏像に刻まれた文字のことです。そのなかで制作年が明らかになる元号や年月日のことを紀年銘と称しています。銘文によりその仏教・道教造像が、いつ、誰が、何のために造ったのか知ることができます。そのため銘文のある造像=在銘像は、各時代の様式差や地方性を考える上で重要なカギとなっています。

□ 四面像

四面像とは、縦長の直方体に成形した石材の前後左右4側面に、尊像や供養者そして銘文などを刻んだ像のことです。本展では2つの道教四面像を展示していますが、もちろん仏教四面像もあり、さらには仏像と道教像を共に表した仏道四面像もみられます。展示している拓本は陝西・西安近郊に現存する仏道四面像の一面で、供養人(寄進者)である仏教徒「仏弟子」と道教徒「道民」双方のすがたが並んでいます。

なお「四面像」という名称は、西魏・甲戌銘道教四面像の銘文にみられることから、南北朝時代から用いられていたことがわかります。

□ 凭几^{ひょうき}

凭几とは、弓なりの天板と三脚からなる、身体をもたれさせるための調度品です。中国の伝統的な器物で、男性が威儀を正す際に用いられる威儀具として重要な意味を持っていました。そのため、北魏後期(6世紀前半)には維摩像の図像にも表されるようになります。その後は維摩像のみならず、道教像や高僧像にも付されるなど広く用いられています。

奈良・薬師寺に伝わる凭几は同寺の休ヶ岡八幡宮に奉納された古神宝のひとつで、日本に現存稀な凭几の実物として極めて貴重です。凭几の形状は獣足である点も含め千年以上にわたり変化していないため、本器の制作年代についてはなお検討が必要です。